二次元ぷち文庫
表紙イラスト：火浦R
岡下誠
奈々の学園ライフ
外伝
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『奈々の学園ライフ外伝』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『奈々の学園ライフ お姉さまをゲットせよ』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

奈々の学園ライフ
外伝
岡下誠
表紙／火浦R
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

舞島(まいしま) 奈々(なな)

引っ込み思案な性格の少女。百合とお近づきになるために生徒会書記になる。

白姫(しらひめ) 百合(ゆり)

学園の生徒会長。高貴な令嬢で、凛々しい姿は後輩たちの憧れの的。

桐原(きりはら) 鈴音(すずね)

奈々のクラスメイトで親友。武道に秀でた大和撫子。長刀部所属。

朝比奈(あさひな) 亜里紗(ありさ)

鈴音の先輩かつお姉さまで、百合の幼馴染み。

「奈々、来賓名簿はいただいてある？」
「はい、お姉さま。教頭先生から頂戴してあります」
舞島奈々は、幼顔をほんのりと赤らめながら答えた。お姉さまからお声をかけていただくと、今でもひとりでに顔が上気してしまうのだ。
ここは貞聖女子学園の生徒会室。
生徒会の役員たちは、卒業式の準備に追われている。
もともとは引っ込み思案だった奈々が、一大決心をして生徒会役員に立候補してから、はや数ヶ月がたった。
遠くから眺めることしかできなかった百合さまとお近づきになり、一緒に仕事をさせていただく。それだけでも、奈々にとっては夢のような日々である。
しかも、姉妹の契りまでしていただいたのだ。
百合さまと。
貞聖女子の一年生ならば誰もが憧れているであろう白姫百合さまと、姉妹の契りを交わしたのだ。
契りの儀式を思い出しただけで、奈々の身体は微熱を帯びてしまう。
口づけを交わし、秘めやかな肌を百合さまの手でまさぐられた。そして奈々は、純潔の証を百合さまに捧げたのだ。憧れ続けていた百合さまの手で、女にしていただいたのだ。

現在、白姫百合さまのことを『お姉さま』と呼べるのは、貞聖女子学園ではただ一人、奈々だけである。

奈々は、敬愛してやまないお姉さまのお顔をそっと見た。麗しく、りりしいお顔。単に美しいだけでなく、気品があふれている。

「来賓の方々のご案内は一年生の仕事よ。粗相のないようにね」

「はい……」

こうして仕事の指示をいただいているだけでさえ、奈々の胸は高鳴り、顔が火照ってしまう。

しかし、奈々の幼顔が赤らんでいるのは、お姉さまとの会話で胸が高鳴ったからだけではない。

別の原因もあるのだ。

優美で気高い白姫百合さまは、他の生徒たちが知らない別の一面をも合わせ持っている。ごく親しい間柄の人たちしか知らない秘められた一面……。

妹となった奈々は、それを誰よりも思い知らされることとなった。

（あぁぁぁ……お姉さま……お許しを……）

奈々は、もじもじと太腿をこすり合わせている。まるで、おしっこをこらえているかのような仕草だ。

校則通りのスカート丈を守っている奈々だが、スカートの中に穿いているのは、貞聖女子の生徒にふさわしからぬ下着である。そもそも、下着の名に値するかどうかすら疑わしい。

奈々の股間に張りついているのは布地でさえない。縄である。

お姉さまの命令で股縄をかけられているのだ。躾けのためという名目で。

ポニーテールの髪型も、その根本を結んでいるレースのリボンも、スカートの丈も、全て校則に従っている。

しかし、スカートの中に穿いているのは淫らな縄下着。女唇の合わせ目には縄が喰い込んでいる。

お姉さまの躾けはそれだけにとどまらない。

初めてを捧げた女肉穴に、マユの形をした淫玩具を埋め込まれていた。

秘めやかな肉穴にそのような異物を入れられるだけでさえ、奈々にとってはこの上なく恥ずかしい。

しかもその淫玩具は、小刻みな振動で奈々の女陰を責め立てるのだ。振動の有無、強弱は、お姉さまの手の中にある小型リモコンによって操作されている。お姉さまの意のままに蠢く淫まゆ玉で、奈々は恥辱と快楽を味わわされていた。

生徒会室にいる今も、淫玩具は微弱な振動を続けている。卒業式に向けての準備をしている最中も、奈々はひそかに快感をこらえていたのだ。

その光景を思い描いて、奈々は身体を熱く高ぶらせた。
下半身裸で校内を引きまわされる奈々。
首輪をはめられ、そこから伸びる鎖はお姉さまの手に。
廊下をゆく女生徒たちは、奈々が体育シャツしか身につけていないことに気づいて目を見張る。ある者はひそかに、またある者はあからさまに、何も穿いていない股間に目をやる。童女のような無毛の女陰門に、好奇の視線を注ぐことだろう。
（つるつるのあそこを見られたら……私……）
身体が熱を帯びているのは、恥ずかしさのためだけではない。お姉さまの手で引きまわされるかと思うと、ひとりでに身体が熱くなってしまうのだ。
「まじめに仕事をしますから……どうか……お仕置きだけはお許しください……」
「そうすることね」
体育シャツに浮き出た尖りを、お姉さまの指先がとらえる。羽毛がかすめるかのような軽やかさでこすりまわされた。
「はぅ……んあぁ……あっ……あん……」
発情してふくらんだ蕾（つぼみ）を布地越しにくすぐられて、奈々は思わず喘ぎをもらしてしまう。
愛撫をおねだりしているのに、くすぐったい刺激しか与えてもらえず、乳首は欲求不満に悶えていた。少しでも快感を貪ろうとして、ますます身をふくらませる。

えっちシーン試し読み
ここからスタート!

「こんなに乳首を尖らせて……。あなた、本当にやる気があるの？」
熱い吐息を耳の穴に吹きかけられ、瑞々しい唇で耳たぶをついばまれた。
耳元のくすぐったさと、乳首のじれったさとが響きあい、奈々の女体はなおのこと発情の度合いを深めてしまうのだった。
（それは……お姉さまが……）
とは口に出せない。
「申し訳……ありません……んぅ……んぁぁ……ああん……」
唇がほどけ、熱い喘ぎがこぼれ出る。
やさしくも巧みな指づかいで左右の乳首を翻弄（ほんろう）され、女の喜びをかなでられた。シャツを隔てることによって、指先の刺激が心地よくもくすぐったいものへと変貌（へんぼう）する。甘美なくすぐったさに上体がわななき、ポニーテールがかすかに揺れてしまう。
もどかしさに悶えて乳首はふくらみきり、今にもはちきれんばかりだ。快感が見えざるお乳となり、じくじくとにじみ出る。
もし摘まれたりしごき上げられたりしたら、乳首の快感だけで気をやってしまいそうだ。
「乳首がこの様子なら、あそこも調べなければならないわね」
「ああぁ……あそこを調べるのは……ご容赦を……」
奈々は太腿同士を閉じ合わせる。じゅくじゅくに潤んだ姫果実から、熱い果汁が搾り出

された。
「どうして？　仕事に集中しているのだったら、あそこを調べられて困ることなどないはずよ」
お姉さまの熱い息吹に耳をくすぐられる。
「んあぁぁ……。そ、それは……」
おびえる奈々の腹部を、お姉さまの手がじわじわと這い下りてきた。
「まさかとは思うけれど、濡らしてなどいないでしょうね」
やさしい口調だが、ぬめるように淫らな響きを帯びている。
無毛の股間を目指して這い下りてくる手を意識しながらも、奈々は身を強ばらせたままだ。両手は机の上に置いたまま。
お姉さまの指先が奈々の女陰をとらえる。
「んあぁぁ……あん……」
無毛の肉饅頭を撫でまわされ、そこに刻まれた縦割れをまさぐり上げられた。姫花びらの間を指腹でねっとりとこすられる。
発情してうずき返った女陰をまさぐられ、奈々は女の喜びに悶えた。お姉さまの指先を感じて、歓喜の蜜汁をもらしてしまう。
「まあ……こんなに濡らして……」

呆れたようにおっしゃるお姉さま。

「仕事中なのにあそこからお汁をもらすなんて、恥ずかしいと思わないの？」

そうおっしゃりつつも、お姉さまは指の蠢きを止めてくださらない。

繊細な指づかいで乳首をくすぐられ、女陰門の合わせ目をまさぐられ、奈々の女体は官能の高ぶりに見舞われる。閉じ合わせた太腿の付け根では、産毛すら生えていない姫花肉が嬉し泣きをした。

（あひっ……あん……ああん……。お姉さまが……いたずらをなさるから……）

両手を机にやったまま、奈々は懸命になって快感をこらえている。

しかし、お姉さまは妹の性感を知り尽くしているのだ。正確な指づかいで性感帯を弄（もてあそ）ばれ、喜びの音色をかなでられた。

書類に集中しようとしても長続きはせず、奈々は快楽に我を忘れてしまう。

「んはあぁ……ああぁ……あんっ……」

お姉さまの膝の上で、奈々はふしだらな喜びをこらえきれずにいた。

童女さながらの幼げな女陰だが、喜びにほころんで発情の蜜を滴らせている。小さな女芯は性的興奮にふくらみ、包皮から剥け出ていた。

かすめるように撫でこすられると、もどかしくじれったい快感を味わわされる。

女芯はもっと快楽を欲しがっているのだが、お姉さまは与えてくださらない。弱火の快

楽でじっくりとじらされ、奈々の肉体は官能にとろけてゆく。
（あ……ああぁ……もう、我慢できない……）
弱火であぶられるかのような快感に屈して、奈々はとうとう口にしてしまった。
「お……お姉さま……。どうか……じらさないでください……。お願いですから……もっと……」
お仕置きを覚悟して淫らなおねだりをする。
じらし責めに屈した奈々の身体からは、すっかり力が抜けていた。快楽のあまりに脱力し、恐れ多くもお姉さまの胸に背中をもたせかけている。
「ふふふ……。私の妹にあるまじきふしだらさね」
お姉さまは、優美な指の先にさらなる淫靡さを込めて奈々の女芯をこすりまわした。羽で撫でるかのような指づかいで。
剥け返った女芯はなおのこと身をふくらませ、もっと激しい刺激を懇願している。膣穴はきゅうきゅうと収縮して、おねだりの汁をもらしていた。
「書類を仕上げるまではこのままよ。ご褒美が欲しかったら、仕事にいそしみなさい」
そうおっしゃる一方、お姉さまは精緻な指づかいで乳首と女芯を翻弄する。体育シャツに浮き出た尖りをこすりまわし、感じやすい蕾をいたぶりまわした。
「あぁっ……あぁ……ああん……。そんな……んあぁ……あんっ……」

乳首も女芯も、快感に悶えてぴんぴんに尖り立ってしまう。
奈々の性感を知り尽くしたお姉さまは、絶妙な力加減で尖りを弄んだ。女芯を揉み転がして気をやる寸前にまで追いやると、一転して乳首をくすぐり始める。乳首をじらし抜いてから、再び女芯を弄ぶのだ。
「あっ……はあぁ……ああん……。このままでは……おかしくなってしまいます……」
鼻にかかった喘ぎとともに奈々はよがり悶える。
執拗かつ淫猥な指づかいでじらされ、肌という肌が性感帯になっていた。体育シャツしか着けていない女体は、ふしだらな牝に剥き上げられてしまう。
「お姉さま……お姉さまぁ……ああぁ……あんっ……」
奈々は、半開きになった唇で悶え啼きつつ、咲きほころんだ女花肉で蜜の涙を流していた。

生徒会室で躾けをしていただいた翌日。
奈々は、いささかの気だるさを覚えてぼんやりとしていた。
体育の授業にも全く身が入らない。
更衣室に戻って着がえている今も、心ここにあらずといった表情で視線を宙にさまよわせている。
（やっぱり……お姉さまの指でしていただかないと……）

奈々と鈴音さんは、互いに顔を見合わせながら身を縮めていた。
「奈々さん……。私たち……どうしてこんなことに……」
「ううぅ……鈴音さん……」
二人とも恥ずかしい格好をしている。
上半身に着けているのは、髪を縛るリボンと体育シャツ。
ブラジャーは着けていないため、体育シャツには乳房の丸みがはっきりと浮き出ていた。
鈴音さんの小ぶりな美乳……。
奈々のたわわな豊乳……。
ふくらみ具合のみならず、頂に息づく乳首の尖りようまでがあらわになっていた。
下半身に着けているのはソックスと上履きだけ。尻肉の丸みも、股間に刻まれた割れ目も、余すことなくさらけ出されている。
体育シャツを着ただけの下半身裸で立たされているのだ。
手は太腿の脇。
気を付けの姿勢である。
手を拘束されているわけではないので、隠そうと思えば隠せないことはない。
しかし奈々たちにはそれができなかった。
奈々も鈴音さんも、見えざる鎖によって手を拘束されているのだ。お姉さまの命令とい

えっちシーン試し読み ここからスタート!

う見えざる鎖で。
手のひらを股間にやることもできず、体育シャツの裾を引っぱり下ろすこともできず、秘めやかな花肉をあらわにしていた。
（あそこ……隠したい……。でも……）
奈々は幼顔をほんのりと赤らめる。
恥部を隠せるのにそれをさらけ出しているというのは、女の子にとっては余計に恥ずかしい。
「二人とも、とても可愛らしいわよ」
そうおっしゃったのは白姫百合さま。
生徒会の会長にして、一年生たちの憧れの的。奈々のお姉さまである。
お姉さまはゆったりと椅子に腰かけて、下半身裸の下級生二人を眺めていた。
気品のただよう美貌に浮かんでいるのはいつも通りの優美な微笑だが、その瞳に宿る光は淫らなぬめりを帯びている。
「下半身裸の女の子が二人並んでいるのって、言いようのない倒錯美があるわ」
舐めずるような眼差しで少女二人の下半身をご覧になっていた。
「妹の自慢会をしようと持ちかけられた時、どうしようかと迷ったけれど、やってみて正解だったわ」

お姉さまは、隣に座っている亜里紗さまの方へちらりと目を向ける。
朝比奈亜里紗さま。
なぎなた部で最も腕の立つお方で、鈴音さんのお姉さまだ。
トレードマークともいえるツインテールを指先で弄びながら、蠱惑的な視線を奈々の女陰に這わせている。
「私が奈々ちゃんのあそこを見たことがあるのに、百合が鈴音のを見たことないのは不公平でしょ」
かつて奈々は、亜里紗さまに悩みを相談したことがあった。百合さまとのことを相談していたはずだったが、いつの間にか身体の悩み相談になっており、あそこを品定めされてしまったのだ。
「久しぶりに奈々ちゃんの天然無毛のあそこを見たいっていうのもあるけれど……」
亜里紗さまはそうおっしゃって、くすくすとお笑いになる。
お姉さまと亜里紗さまとは、幼い頃からの親友同士。お二人とも妹を持つ身となったので、互いの妹を披露しあおうということになった。
奈々は、女の喜びを教えていただいた上級生に再び女陰を見られ、恥ずかしさに幼顔を赤らめている。
鈴音さんも凛とした顔を紅潮させていた。姉以外の上級生に女唇を見られて、羞恥を覚

えているのだろう。
上級生のお二方は、恥じらいに悶える下級生たちをご覧になって、心から楽しんでいるご様子だ。
「奈々ちゃんのあそこ、やっぱりつるつるのぷにぷにで可愛いわ」
「ふふふ……。亜里紗に褒めてもらって、奈々も喜んでいるわ」
お姉さまは、微笑とともにちらりと妹の方を見やる。
(よ、喜んでなんかいません……)
「その証拠に、ほら……乳首があんなに尖っている」
豊かな乳房によって張りつめているシャツには、はしたなく尖り立った乳首がくっきりと浮き出ていた。
奈々は、湯気が出そうなほどに顔を赤らめる。
「でも、前とくらべて、少し花びらがはみ出てきたんじゃない？」
「私が毎日のように愛しんできたからかしら」
女唇のことをあれやこれやと品評され、奈々は恥ずかしさに身を灼かれていた。
(あそこ……見られちゃってる……。品定めされちゃってるよ……)
幼顔を紅潮させつつ、太腿同士をもじもじとこすり合わせる。
上半身に着た体育シャツが、剥き出しの下半身を引き立てていた。産毛すら生えていな

い股間にお二人の視線が這いずりまわるのを感じ、恥ずかしさのみならず秘めやかな興奮をも味わってしまう。
「鈴音さんのあそこ、やはり亜里紗が剃っているの？」
「そうよ。三日おきくらいにね」
「うらやましいわ。剃毛する楽しみがあって」
「奈々ちゃんのあそこだって、剃り痕が全くなくて、とっても可愛らしいじゃない。鈴音にも永久脱毛をさせようかしら……」
亜里紗さまのお言葉に、鈴音さんはびくんと身体を震わせた。
「奈々、鈴音さん。今度は、中身も見せてちょうだい」
妹二人は互いに顔を見合わせる。
それぞれのお姉さまの前ではいつもやらされていることだが、他の人を前にしてするのはやはりためらわれた。
「できないのなら、その格好で校舎内を引きまわしてもいいのよ」
そうおっしゃって、お姉さまは鎖付きの首輪をちらつかせる。
「鈴音と奈々ちゃん、どちらか遅かった方を引きまわし刑にしましょうか」
亜里紗さまのお言葉に、妹二人はあわてて股間に手をやった。女陰門に左右から人差し指をあてがい、ゆっくりと割りくつろげる。

女陰門を両手で開陳したのは、そのように躾けられたからだ。両手を使って広げることによって、「あらがうことなく捧げる」という意思を示すのだとか。

また、ただ割り広げるだけでなく、丁寧な言葉づかいでの口上も求められている。

「亜里紗さま……お姉さま……。どうか奈々のあそこを……ご覧ください……」

「百合さま……お姉さま……。鈴音のあそこ……存分にご検分くださいませ……」

女の子として最も秘めておきたいところを開帳しながら、うやうやしい言葉で品定めをお願いしなければならないのだ。

体育シャツを着ただけの恥ずかしい格好で、股間をわずかに前へせり出させ、両手で股間を割り広げている。

下半身裸で立ち放尿をしているかのようだ。

奈々も鈴音も、恥じらいに瞳を潤ませながら顔をうつむかせている。女の子にとってこの上なく恥ずかしい姿勢で、女性器の品定めを待っていた。

「では……鈴音さんのあそこ、試させてもらうわね」

優雅かつ淫靡な微笑を浮かべながら、鈴音の女肉穴に中指を突きつける。

「心ゆくまでどうぞ」

答えたのは亜里紗さま。

お姉さまは、しなやかな中指で女肉穴をえぐり上げる。

「んあああああぁぁぁ……」
秘めやかな肉穴を貫かれて、鈴音さんは身体をびくんと引きつらせた。脚をわななかせる。
「ふふふ……。やはり奈々とは微妙に吸いつきが違うわね」
妹との違いを確かめるように、お姉さまは中指を抜き差しした。やさしく、ねっとりと……。
「んあぁ……あぁ……百合さま……んあぁ……」
武道で足腰を鍛錬しているはずの鈴音さんも、お姉さまの指づかいに官能をかなでられて、脚を細かに震わせていた。
「鈴音ったら……百合の指であんなに乱れちゃって……」
亜里紗さまは妹の乱れ姿に微笑している。
「ならば私も、奈々ちゃんを楽しませてもらうわ」
ツインテールの上級生は、無毛の女唇に顔を寄せた。割り広げられた女陰門の内側を、中指でなぞり上げる。
「あひぃぃ……」
軽くなぞられただけなのに、奈々は大げさな嬌声(きょうせい)を上げてしまう。
「あそこを広げている指を離したら……あそこ丸出しで引きまわしの刑よ」
そう釘を刺しておいてから、亜里紗さまは手のひらを上に向けて、中指の先で女肉穴を

かきまわした。
じっくりといたぶってから、汁に潤んだ女肉穴をえぐり上げる。
「んうぅぅ……んん……」
お姉さまの前でふしだらな声を上げまいとして、奈々はきつく唇を結んだ。
その様子を蠱惑的な上目づかいで見ている亜里紗さまは、どうあっても奈々をよがり啼かせるおつもりらしい。
「百合の前で、たっぷりと啼かせてあげるね」
粘つくように淫靡な指づかいで抜き差しした。
秘めやかな粘膜を押し広げられ、こすり上げられ、女の喜びをかなでられる。
「んうぅ……んあぁ……ああぁ……あんっ……」
亜里紗さまの指づかいに屈して、ふしだらな喘ぎをもらしてしまう。
女肉穴は歓喜に悶えて、きゅうきゅうと収縮した。発情の蜜汁を滴らせながら上級生の指を貪欲に喰い締める。
「ねえ、奈々ちゃん。私の指づかいと百合の指づかい、どっちが気持ちいい？」
巧みな蠢きで女肉穴を指姦しつつ、亜里紗さまはお尋ねになった。
「あひっ……あんっ……ああん……。お、お姉さまの方が……いいです……」
お姉さまへの貞節から何とかそう答えた奈々だが、声は喜びにうわずってしまう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/